王女Bがヒロイン座獲得のため設定叩き潰します。

佐倉風弦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
王女Ｂがヒロイン座獲得のため設定叩き潰します。

【Ｎコード】
Ｎ５７８４Ｘ

【作者名】
佐倉風弦

【あらすじ】
私の姉は、勇者に助けられる役割を担うヒロイン、姫の役割を持つ者です。それに対して私は、王女Ｂ。何もかもが姉に劣り、勇者の目にも留まらない《設定》なんです。
けど、そんなこと納得できません。《設定》ごときで役目を決められまさかセリフが「さらわれたお姉さまを助けてください」で終わるとかホントに嫌です。
だから、決意したのです。
姉からヒロインの座を奪ってやると！

プロローグ

……知ってますか？　よくあるＲＰＧのストーリーは魔王にさらわれた姫を勇者が助けて姫は勇者とラブラブになるんです。いいですよね、それ。勇者とラブラブになったら安心ですし……。ちなみに私の姉のレシャーナはその役割を持つ姫。そして私は……王女Ｂ。……何なんでしょうね、この格差は。

レシャーナって可愛い名前で、それに対して私の名前はマコ。全然王族っぽくありません。あとですね、容姿。レシャーナは輝く黄金色の長い髪に真っ白なドレス。顔は言うまでもなく美人です。私は……王族にはあまり見られない黒髪に短い髪。服は、戦士服。だってしょうがないじゃないですか。きれいなドレスなんて似合わないんですから。顔は普通。美人すぎるレシャーナとはひどい違いなんです。容姿、性格……全てにおいて私はレシャーナに劣る。

そういう―《設定》なんですから。要は、ヒロインになるレシャーナに私が勝っていてはいけないんです。ですから、何もかもレシャーナには勝てない。勝てることは、剣と魔法の腕ぐらいです。ここは、魔王にさらわれる姫は強くてはいけませんから。―《設定》なんです。

……何が《設定》ですか！？　《設定》ごときで格差をつけられてレシャーナより目立たないように、勇者の目に留まらないようにかふざんけんなって言いたいです！

私は、決意しました。

――――レシャーナからヒロインの座を奪ってやるのです。

まさか役目が「さらわれたお姉さまを助けてください」ってセリフ一つで終わっては納得がいきません。私自信の力で、《設定》を

ひっくり返してやるんです。

gem1

マレイア城は、私の父が治める城です。父はマレイア王国の国王で大きな権力を有しています。私は自室で窓越しに見える青と白のグラデーションを繰り広げる空を見つめていました。そのきれいな色は見ているだけで心を穏やかにしてくれます。

この世界では、誰もがシナリオ通りに動きます。勇者は魔王退治に向かい、魔王は世界征服を目論む。姫は魔王にさらわれる。《設定》に従って生きるんです。私に与えられた《設定》は姫の妹……さらわれた姉の身を心配する……。それだけです。完全に脇役です。でも、私はそんな脇役なんてごめんです。どうせなら、大きな役割を担いたい。何もかも姉、レシャーナに劣りますが、それでも……。

何が《設定》ですか！　私はそんなものに縛られてやるほど大人しくはありません。

レシャーナから、ヒロインの座を奪ってやります。

部屋を出ると、赤い絨毯が敷かれた廊下でした。長い廊下を歩いて、レシャーナの部屋の前で足を止めます。……《設定》なら今日のはずです。レシャーナが魔王にさらわれるのは……。レシャーナからヒロインの座を奪うということは、変わりにさらわれなければいけません。……ヒロインの座を奪うためとは言え、やはりそれはちょっと……とは思います。勇者に救出されるまでの間、魔物に囲まれて過ごさなければならないんですから。少し緊張しながらドアをノックします。

「はい、誰ですか？」

透き通ったような美しい声が聞こえてきます。その声だけで、ド

アの向こうにいるのがとんでもない美人だということが分かってしまいます。ちなみに私は、あんなきれいな声は出せません。

「姉様、私です」
「マコ？」

ドアが開き、レシャーナの姿が目に入る。もはや天然記念物並みの美しさをかもし出す人知を超えた美人です。黄金色の髪に白いドレス。ドレスなんか着ていなくても美しいことに変わりはないでしょう。私は、激しくこの姉に劣ります。

けれど、奪ってみせます！　……いや、魔王の変わりにレシャーナを奪うという意味ではなく……レシャーナからヒロインの座を。恐らく魔王はこの部屋に来るでしょう。魔王が来る前にレシャーナを隠しておく必要があります。もし、レシャーナと私が並んでいたなら魔王は確実にレシャーナを持っていくでしょう。そうならないために、レシャーナを隠す。一応、姉を庇ってさらわれたことになると思うんで、私の立場が悪くなることはないでしょう。

「今日ですよね……」
「……そうね」

レシャーナは暗い顔をします。そんな表情でも変わらず美しさを保っています。その美しさをちょっと私に分けてください。こんな顔をするということは、やっぱりさらわれるのは嫌なんでしょう。いくら勇者が助けてくれると言っても気分のいいものではありません。なら、好都合です。私は、豪華な赤色の椅子に腰掛けてレシャーナに問います。

「姉様、やっぱり恐いんですか？」
「大丈夫よ。それに……設定だから仕方ないもの」

「そうですか……」

私は、すぐに立ち上がりました。もはや椅子に座る必要もないほどすぐに。

「姉様」

「なに？」

「ていっ」

振り向いたレシャーナの頭を叩きました。強めに叩いたのでレシャーナは気を失って倒れました。レシャーナを引きずり、とりあえずベッドの下に詰め込みました。まあ、目が覚めたら自力で出て来られる場所です。

ふと、足音が聞こえました。振り向くと、後ろに立っていたのは黒い髪に紫色の瞳……そして、漆黒のローブ。その外見は少年のようですが……。

「あんたは……」

「俺？　魔王、かな」

「……」

どっと冷や汗が出ます。もしかしたら、今のを見られていたかもしれません。もし、見られていたならコイツはベッドの下のレシャーナを引きずり出して連れて行ってしまうでしょう。

「君が王女？」

「そ、そうです……」

……さっきのやりとりは、見られてなかったんでしょうか？　魔王は不思議そうにこちらをまじまじと見つめてきます。

「おかしいなぁ。王女ってもっと美人だった気がしたんだけど……気のせいかな？」
「あんた目、悪いんじゃないですか？　老化には気をつけた方がいいですよ」
「誰が老化だって？　言葉には気をつけなよ。殺されたいの？」
あれ？　魔王って姫にこんなセリフ吐かないと思うんですけど？
「まあ、いいや。とりあえず命が惜しかったらもう少しおしとやかにしておきなよ」
魔王がそう言った途端、意識が遠くなっていきました。

ｇｅｍｅ２

目を覚ますと、ベッドの上でした。そのベッドは真っ黒で豪華な雰囲気です。ここは、魔王城でしょうか？　周囲を見回すと悪趣味な置物が大量にありました。……とりあえず、レシャーナの変わりにさらわれることはできたようです。あの魔王もうまく騙されてくれたようで……。

「ちょろいですね」

思ったことを素直に口に出してしまいました。

「誰がちょろいって？」

振り向くと腕を組んで顔に怒りマークを浮かべる魔王がいました。声をかけられるまで全く気づきませんでしたから、恐らく気配を消していたのでしょう。どうやら今のセリフは聞かれてたみたいです。何がちょろいのか正直に説明してしまえば城に投げ返されて、レシャーナと交換されてしまう危険性があるので言いません。

「いや、何でもないです」

「……ふーん。ま、いいや」

そう言って魔王は、豪華な椅子に腰掛けます。それにしても、この魔王はとても魔王とは思えない容姿をしています。どう見ても、少年のようにしか見えません。魔王と呼ばれるほどの威厳も一切感じられず、あとこれは非常に失礼ですがそんなに強そうにも見えません。けど、魔王だというのなら見た目がどうであれ強いことに間違いはないのでしょう。

「そう言えば、あんたの名前は何て言うんですか？」
「魔王に向かってあんた？」
「じゃあ、どう言えって言うんですか？　魔王って呼べばいいんですか？　あ、いや、今から名前教えてもらうんですし、名前でいいですよね」
「まあ、いいけど。俺の名前は、シオール。で、君は？」
「私はマコです」
「……っっ！」

私の名前を聞いた途端、シオールは腹を抱えて俯きました。もしかして、お腹が痛いんでしょうか？　しかし、魔王が病気という《設定》はありえないと思います。魔王が病気だったら、勇者は何も苦労なんかしませんし……。

「ふふふ……何その名前。すごく笑えるんだけど」

お腹が痛かったわけじゃないようです。あろうことか、人の名前を聞いて笑うという失礼な……。

「王族でその名前って本気なの？　その辺に転がってそうじゃないか」
「……しょうがないじゃないですかっ！　名前は自分で決められないんですよ！」

確かに、その辺の村人とかにいそうな名前ですけど……そんなに笑うことないじゃないですか。私だって、レシャーナみたいな可愛くて素敵な名前が良かったですよ……。でも《設定》のせいで名前すらレシャーナに劣るような平民並みなんです。

「もう人の名前笑うとかひどいじゃないですかっ！　さっさとくたばれ！」
「くたばれ、ね。姫の言葉とは思えないよ。ちっ……他の国の姫にすればよかったな」
「舌打ちしないでください！」
「あ、忘れてた」

シオールは立ち上がると、引き出しから何かを取り出してこちらに戻ってきます。……あれは、首輪でしょうか？　犬につけるにしては、大きいですから下っ端のドラゴンに……いや、ドラゴンにつけるには小さそうです。

「これ、つける？　逃げないように」
「に、逃げないですよ！　逃げないからそれはやめてください！」

そんな物つけられたらいろいろ大事な物を失ってしまう気がするんで断固拒否です。ホントに勇者のところにお嫁に行けなくなりそうです。……この調子だと、勇者がここに来る頃に私はまだお嫁にいける状態なのか心配でなりません。

「嫌ならでかい口叩かないようにね」
「この……クソ魔王……」
「何か言った？」
「い、いえ、何も……」

本気で心配です……。

ｇｅｍｅ３

それにしても、私は……従来のＲＰＧがどういったものなのか知ってはいますが姫がさらわれている間何をしているかは知りません。姫が魔王城で何をしているか公開されているものなんてほとんどないでしょう。だからこそ、私も何をしたらいいのか分かりません。

とりあえず部屋のなかをウロウロしてます。

いや、もうホントに何したらいいのか分からないんです。何しましょう……？

外に出ることはできませんし、遊べそうなものは部屋にはありません。ひたすらウロウロしていると不意に扉が開きました。

私はびっくりしてそのままのポーズで固まります。

姿を現したのは金髪の髪を二つに結った可愛らしいメイドさんです。フリフリの可愛いデザインのメイド服はここが魔王城であることを忘れてしまいそうです。

彼女はシオールのメイドさんらしいムーラさんです。ムーラさんはにこりと微笑みます。

「おはようございます、マコ様。昨日はよく眠れしたか？」

「全く……」

「そうでございますか。ちゃんと眠らないとお身体を壊してしまいますよ？」

にこにこ笑顔が可愛らしいです。

何ですかこの人！？

脇役ですよね！？　モブキャラですよね！？

それなのに私より可愛くないですか！？

これって危機的状況じゃないですかぁっ！　姫が魔王の使用人に負けるとかあり得ないじゃないですか！

まあ、私は偽者なんで仕方ないんですけど。
いや、これ言っちゃうと自分でも傷付きます。
もしかして、このムーラさんはただの使用人ではなく四天王に一人とか？
それなら頷けます。
そういう重要な役割を持っているならこのように整った顔立ちでその辺の脇役より目立つように計らわれてるんでしょう。
そうです。そうに決まってます。
でも、危機的状況には変わりありません。
なぜか多分四天王確定のムーラさんが姫の私より可愛いんですよ？
周りから見ても明らかなはず。
あまり考えないようにしましょう。
考えてはいけないんです。

「マコ様？　大丈夫ですか？」

ムーラさんは心配そうに私の顔を覗き込んできます。
ここは魔王の砦だと言うのに、メイドさんはこんなに優しいなんて。
不安だった私の心を暖かく溶かしてくれそうです。
私もにこっと笑います。
こんな優しさを自分に向けられると自然に笑うことができます。

「大丈夫です」
「そうでございますか」

それにしても、魔王城といえばごつくて恐ろしい魔物が大量にいると思っていましたがそうでもないようです。

案外人間……いや、人間ではないのかもしれませんが、人型の何かがたくさんいるみたいです。
目の前のムーラさんだって魔王に仕えてるぐらいですから、普通の人間であるとは思えません。
魔人と人間は非常に区別が付きにくいと言いますし、魔人の可能性が高いと思います。

「では、行きましょうか？」

頷き、ムーラさんの後について行きます。
真っ黒な床を歩いていると何ともいえない気分になります。
何でしょうね？
どこか恐怖にも似た感情なんです。
床が黒いだけにそういう感情が生まれてしまうのかもしれません。

ムーラさんに案内されたのはシオールの部屋でした。
悪趣味な黒いベッドと置物、テーブルなんかが置かれています。
黒一色ですが、王宮なんかの赤一色とはまた違った豪華な部屋です。
畜生、私の部屋より広いじゃないですか。羨ましい……。

「畜生……滅んでください」
「誰が滅べって？　何？　君、本格的にいじめられたいの？」
「私はそんなマニアックな趣味じゃないですよ！」
「まあ、俺も後悔してるよ。こんな変な王女連れて来たなんてさ」
「あんたが寝てる時にナイフで刺していいですか？」
「べつにいいけど、それぐらいで俺は死なないし……ひどい仕返し

受けたくなかったらやめとくのをお勧めするよ」
私は首を傾げました。
「仕返しって何ですか？」
一応《設定》で魔王は姫を殺せないことになってるので殺されることはないと思います。
でも、だとしたらどういう？
「羞恥系で」
「私なんか食べてもおいしくないですよ……」
胸もないし、未発達なんです。きっと！
きっとこれから成長するんですよ。
決して、これで成熟体ということはないはずです。
かならずナイスバディになるはず。
そう決まっているんです。
「あ、何があっても勇者様のところにお嫁に行けなくなるようなことは……」
「今すぐお嫁に行けなくしてあげようか？」
「ブン殴っていいですか？」
「いいけど、覚悟しなよ？」
「やめときます」
ブン殴りたいのを堪えます。
ムーラさんは何でこの状況でにこにこ可愛らしい笑顔を浮かべているんですか？
この場の空気を和ませるためですか？　それとも面白がってるん

ですか？

「あ、そうだ。一つ教えてあげるよ」

「何ですか？」

シオールは一旦、口を閉じ、再度開きます。

「俺は設定をひっくり返すつもりなんだ」

「え？」

予想しなかった言葉に首を捻ります。

「魔王は勇者に倒される。この設定もね。負けるなんて嫌じゃないか」

「それは……」

つまり、シオールは勇者を返り討ちにするつもりでいるのです。

設定をひっくり返す。

これ自体は私と同じです。

目的が違うだけ。

ですが、シオールが勇者に勝ったりしたら私はどうなるんでしょうか？

こ、これは阻止しなければいけませんよね？

ｇｅｍｅ４

マコ様が魔王城に来て数日が立ちました。
私はメイドなのでお世話なんかを任されているのです。
今は用事も終わり、私は自室のベッドに腰掛けゲーム機の画面と真剣に向き合っていました。
何でゲーム機があるのかって？
この世界には何でもあるんです。
私が好きなのはエ●ゲです。
はい、画面に女の子がいます。服を脱ぎかけたそれはもうエロエロフィーバーです。
私の手にかかればどんなエ●ゲの女の子もたちまち落とされてしまうんです。素晴らしい才能だとは思いませんか？
もちろん私は、ＳＭプレイも束縛プレイも何から何まで熟知しているのです。
ゲーム画面から視線を話さずに私は思考を巡らせます。
マコ様が来てから数日が経過するのに何の進展もないんです。
なぜでしょうか！　あのシオール様のことだから手が早いと思っていたのですが、なかなか行動を起こしません。
さらわれたお姫様と言えばやっぱりアレじゃないですか！
×××とか×××とかされちゃったり、エロエロな展開が！
しかしシオール様は何もしません。
なぜですか！？
私はエ●ゲのような展開を期待しているというのに！
もしかして、《設定》のためやっぱり勇者以外は姫に手を出してはいけないんでしょうか？
しかしそんなもの、関係ありません！
二人が行動を起こさないなら私が何とか！
ゲーム機の電源を落としてベッドの下にしまうと部屋を出ます。

「シオール様」

私は笑顔を作りながら、テーブルに肘をついて本をパラパラ捲っているシオール様に声をかけます。

シオール様はこちらに視線を移します。

「何？」

「シオール様は、マコ様に手を出さないんですか？」

「あのガキに？　冗談じゃない」

不満そうな顔でシオール様は呟きます。

しかし、これで引く私ではありません。

「何なら、私がいろいろ伝授いたします」

「伝授？」

「はい。×××縛りから×××縛りまで幅広い束縛方法をお教えいたしますよ？　あのマコ様なら縛ってみたらきっと可愛いですよ？」

「いや、その知識はいらない」

「きゅう……」

シオール様もなかなか手強いです。

意外に難しいですね。どうやって説得しましょう。

「むー、何やってるんですか？」

「ままままマコ様！」

突然マコ様が部屋に入って来ました。
眠そうな目を擦っていることから、眠っていたんでしょうか？
そして声が聞こえて起きてしまったというところですね。
危ない危ない。うっかり今の話を聞かれてしまうところでした。

「ガキはさっさと寝てなよ」
「な、何ですかそれ！」

シオール様の言葉にマコ様が憤慨したようです。
きっと彼を睨みつけています。
しかしマコ様の可愛い眼光では残念ながら迫力は……。
シオール様の態度も私には分かります。
ツンデレです。シオール様は一見そんな感じはしませんが密かにツンデレなんです、あの方は。
対してマコ様もツンデレです。
そう、二人ともツンデレです。両方素直じゃない分、通常より衝突も激しいのです。
しかし二人共可愛さ満点です。
ツンデレダブルで喰らったら私はもう！
しかし！　なぜかエ●ゲ的展開が来ません！　早く来てください！
マコ様は防御も固いようでいつもズボンを履いてます。これではお約束のパンチラが発生しません。
何て勿体ないんでしょうか！　これだとズボンをずり下げるしかありません。
そうだ、スカートでも薦めてみてはどうでしょうか？
ついでにノーパンだったらもう眼福です。ノーパンミニスカとか萌え死にます！
今度薦めてみることにします。
てかシオール様はまだ手を出さないんですか！

手を出す前に勇者が来てしまったらどうするんですか！

「ガキなんだから眠いんだよね？　所詮ガキだから遅くまで起きてられないだろう？」

「うっく……眠くなんか……」

はい、マコ様は眠そうですね。

子守唄でも歌ってあげたいぐらいです。

と言うわけで子守唄歌っちゃいます。

「ね～む～れ～よ～～」

「ムーラ！？　それは、歌ったらダメじゃないか」

「うむむぅ」

この歌は魔法の一種です。

相手を眠らせてしまうのです。

五分もたたないうちに二人とも眠ってしまいました。

これで後は、二人を同じベッドに放り込んでおけばいいのです。

翌朝、私は再び部屋を訪ねました。

お二人ともぐっすり寄り添って寝ています。

「おはようございます、シオール様にマコ様」

笑顔で挨拶します。

「ん？」

二人共目を覚まして起き上がります。

「え？」

マコ様が顔を真っ赤にします。

「な、ななな何ですかコレーーーーーーーーーーーーーーーーーー！？」
「何で俺のベッドで君が寝てるんだガキ」
「知りませんよ！　何でアンタのベッドに！　な、何したんですかぁっ！　お嫁に行けなくなってたらどうしてくれるんですかぁ！？」

その場合はシオール様が責任取ってもらってしまえば良いのです。

ｇｅｍｅ５

私は王室で豪華な赤い椅子に腰掛けるお父様の前に立っている。
きれいな装飾が施された王室は、豪華な雰囲気がかもし出されている。
私は、本来魔王にさらわれるはずだった。
けど、そうはならなかった。
妹のマコが私の変わりにさらわれてしまった。
気を失って目を覚めた時にはマコの姿はなかった。
これは、もう《設定》の改変。
お父様が難しい表情で口を開く。

「マコもお前がさらわれると知っていて、見過ごすことはできんかったのだろう」
「そうね……」

《設定》のことは、皆知っている。
何が起こるのかも事前に分かっている。
私は、正直そのさらわれる王女の役割を恐いとも思っていた。
マコはそれを見通していたのかもしれない。
私も何かしなければ。
役に立たなければ。
マコのためにも。
けど、そんな簡単に思いつかない。

「陛下！」

扉が勢い良く開き、兵士の一人が息を切らしながら駆け込んでくる。

一体何が？

「勇者様がおいでになられました！」

早い。

まだ私は何をやればいいか、思いついてないっていうのに。

「すぐに通せ」

お父様が命令すると、兵士は敬礼してすぐに踵を返して駆けて行った。

どうしましょう。

私は何をすればいいのか。

そうしているうちに、勇者様が姿を現した。

金髪金目で整った顔立ち。どこか清い雰囲気の漂う勇者用の軽装。

誰よ！？　間違えてホストを連れて来たのは！

勇者とホスト間違えてどうすんの！？

役割が全く違うでしょうが！

「はじめまして、僕が勇者エルデンです」

あら？

勇者って言った？

勇者だったのね。でも、ホストでもやれば一日かなり稼げそう。

わ、私ったら何を！？

勇者様をホストだなんて失礼な！

今の考えは、ミスよ！　脳のミスなの。

それよりも、今の私にできることを――。

はっとした。

「ちょっと準備してくる！　勇者様、待ってて」

言い残し、私は王室を出て全速力で廊下を駆ける。
お父様が私の名前を呼んでるみたいだったけど、無視した。
廊下を歩いていた僧侶の前で立ち止まる。
これ！
ぺこりと頭を下げる。

「ごめんなさい！　それ貸して！」

私は僧侶の服を剥ぎ取り、杖も奪った。
僧侶は顔を真っ赤にして慌てる。

「レシャーナさまあああああああ！？　私の服ーーーーーーーー！」
「替えはあるでしょ！」

剥ぎ取った服と杖を持って近くの部屋に駆け込むとドレスを脱ぎ捨て、僧侶用の服と帽子を着用する。
そして、すぐさま王室を目指して駆けた。

王室の扉を勢い良く開け、大声で言う。
勇者様の耳に届くように。

「勇者様、私も連れてって！」
「レシャーナ、何を言っておるんだ」
「お父様は黙りなさい！」
「ぐふ」

お父様が落ち込んでるけど気にしない。
勇者様を真剣に見る。
勇者様は目を丸くして立ち尽くしている。
早く返事しなさいよ！
あ、もしかして私が役に立つかどうか分からないとか？

「私は回復魔法が使えるの。役に立つはずよ」
「では、お願いします」

返事が早かった。
役に立つと分かった途端にこれなのね。

「よろしくお願いします、レシャーナさん」
「早く！　早く出発をしましょう！」
「れ、レシャーナ……」
「お父様は黙りなさい！」
「ぐふ」

無事に連れてってもらえることになった。
それにしても、この僧侶用の服……ぶかぶかで胸が小さく見える！？
どうしてくれるの！？
あ、ダメね。贅沢言っちゃ。
マコはもっと不憫なんだから。
――――胸が。

「では、レシャーナさん。あなたのことはお守りしますので安心してください」

なかなかいい奴じゃない。

笑顔も太陽みたいで眩しい。

「お願いね」

「はい、あなたがスライムにボコボコにされた時は任せてください」

「待ちなさい！　ボコボコって既に事後じゃない！　しかもスライム限定！？」

とりあえず、スライム限定で守ってくれるみたい。

ｇｅｍｅ６

相変わらずお二人に進展の兆しは見えません。
どうしてこうも進展しないのでしょうか？
私は毎日フリフリのメイド服を着て、笑顔で愛想振り撒いてエ●ゲをプレイしながら心待ちにしているというのに。
エロ展開はまだですか！
ゲームをプレイするのもいいですが、やっぱり生で見てみたいじゃないですか！
人がエロエロやってるのを見るのは良くないことかもしれませんが、私の最大の栄養補給はそういったものをこの眼で見ることです。
もちろん、私が見ているのが分かったら本人達はやめてしまう可能性が極めて高いので気配を押し殺し、まるで空気の如く観察したいと思っています。
しかし、肝心のお二人は何もしません。
これでは意味がないじゃないですか！　一体何のために同じ城のなかにいるんですか！？
いえ、《設定》のためとは分かっていますが、私にとって男女が同じ場所に住むのはそういうエ●ゲ的展開を繰り広げるためだと信じています。
せっかくこの前、同じベッドで寝たと言うのに何もなかったのがいただけません。
私は簡単には折れません。
これから、またシオール様を説得に行こうと思います。

朝食の片付けを終えた私は、長い廊下を歩いてシオール様の部屋に向かいます。

黒い窓から見える空は、穢れを寄せ付けない清い空間を展開していました。
見ているだけで心が洗われるような気がします。
最も、私がエロを見たいという心は洗われませんが。
シオール様の前で立ち止り、軽くノックをするとゆっくりとできる限り音を立てないように扉を開けます。
なかに入ると丁寧に頭を下げて、部屋の端に立ちます。
黒で埋め尽くされた部屋の中央のテーブルで、シオール様はぼーっとした様子で読書に励んでいます。
そんなことしてる暇があったらマコ様のところに行ったらどうですか！？
キスして押し倒して×××とか！

「シオール様」
「何？」
「マコ様に×××とかしないのでしょうか」
「ムーラ、よくもそんな下品な言葉を」
「エロは正義です」

私は、笑顔で言いました。
シオール様はため息をつきました。

「早く行動に出ませんと。あ、そうだ。いっそ鞭とかどうですか？　良ければ、私のものをお貸し致しますよ？　もちろん、戦闘用ではなく×××用なので威力は低いから問題ないかと」

「とりあえず、君が何でそんな物を持ってるのか聞こうか」
「私もここに来る前はすごかったんですよ。×××女王様と異名をいただきました」
「そんな下品な異名がつくぐらいだから相当なんだろうね。それに

しても、何で鞭を？」
「私の見立てでは、シオール様は間違いなくSだと思いますので。マコ様は――間違いなくノーマルだと思いますけど」
「黙りなよ」

シオール様が顔を引きつらせます。
そんなにひどい会話なのでしょうか？
私には普通の話なんですが。

「では、拘束具でもお貸ししましょうか？　マコ様なら顔を真っ赤にしながら泣きますよ」
「うん、泣くだろうね。君の考えがひどくて嫌になるよ」
「そんなにマコ様のことを大事にお想いなんですね」

私がそう告げ、にこりと笑うとシオール様はピキッと顔に怒りマークらしきものを浮かべました。

「ムーラ、今日で君クビだから荷物慌てて出てけ」
「それは無理です。設定で私はここのメイドをやめることはできません」

こういう時は《設定》というのは便利です。
これにより、避けられることも多いので。
シオール様がお怒りのようなので次はマコ様を当たってみようと思います。

マコ様の部屋の扉をノックして扉を開きました。
なかでベッドに腰掛けていたマコ様が何か勘付いたのかこちらを見て、難しい表情をします。

「どうしましたか、マコ様？」
「あ、その、今日のムーラさんは何か雰囲気が違うような気がしたんで」
「あら」

いけませんわ、私ったら。
エロい考えを表したピンク色の華々しいオーラがだだ漏れになっていたようです。
隠しませんと。

「お隣よろしいでしょうか？」
「あ、いいですよ。座っちゃってください」

マコ様の隣に腰掛けます。
ふわふわのベッドは心地よいです。

「マコ様はシオール様のことがお好きなんですよね？」
「……っ！？　な、何を言ってんですか！？　そんなわけないじゃないですかぁっ！」

顔を真っ赤にしながら全力で否定しています。
流石、ツンデレ。
完全に否定しつつ可愛さ全開という恐ろしい状態。
思わず抱きしめるか、縛り上げるか、いじめるか、×××してあ

げたくなります。

「ですから、×××とかは」

「何言ってんですか！？　そ、そそそんなっ、そんなこと、できませんよ……」

マコ様は、顔を赤くしてキョロキョロどうでもいい所を見回したり挙動不審です。

可愛いですね、やはり。

そう言えば、

「ぺたマコ様」

「何てひどいあだ名なんですかっ！　人の悩みと名前を結合させるなんて」

お怒りになったマコ様が可愛い眼光で睨みつけてきます。

可愛いから恐くないんです。

ちなみに、ぺたマコはぺたんこ（胸が）とマコを合わせてみましたが不評なようです。

「そんなに、ぺたんこじゃないです！　B……いや、Cはあるはずです！」

ということなので、試しに握ってみます。

ぺたんこでそれは困難かと思われましたが、何とかできました。

「ふぐ……！？」

「ーAですね」

「マイナス！？　せ、せめてAでいいじゃないですか！」

「ご安心ください。シオード様は巨乳より貧乳派ですから」

「あんな奴の好みなんか知らないですよ！」
「ぺたんこで大丈夫です」
「ぺたんこじゃないです！　脱いだら分かりますよ！」

脱いでくれるそうです。
マコ様は躊躇いもなく服を脱ぎ捨てました。
白い布で予想通りぺたんこの胸を巻いています。
白い肌が何だかつつきたくなってきます。

「ムーラ、俺でもこのぺたんこは流石にないよ。せめてBはいるね」

隣でシオール様が呟きました。

「え？」

マコ様は目を擦りながらシオール様を見て、次は自分の身体に視線を移します。
顔がゆでだこ状態です。

「……」

ポロポロ涙を流し始めました。

「うー……、姉様助けて。変態がぁ……」
「そのぺたんこの胸でまだ女ぶるとは往生際が悪いね」

さらに泣きます。
これ以上泣かせてどうするんですか、シオール様。
ここで泣き止ませるのが男の見せ所だと言うのに！
まあ、少し進展したの良しとしましょう。

これも、エロ展開への一歩です。

gem7

魔王城に来て数日がたっていました。
けど、あまり不自由はしていません。ムーラさんが作ってくれた美味しい食事をすることもできるし、本を読んだり城内をうろうろしたり大抵のことはできます。
魔王城に連れて来られたら、てっきり牢屋にでもブチ込まれるかと思ってたんで拍子抜けです。
いや、牢屋にブチ込まれたかったわけじゃないですよ？
今の状態の方がありがたいです。

城内には大きな書庫が存在しています。
ちょっと薄暗いですが、本棚がいくつも並んでいて様々な本があります。一生かかっても全て読みきることは難しそうです。
本棚に目を凝らします。
とりあえず面白そうな本を探しているんです。
適当に一冊、手に取ってみますが見たことのない文字で書かれていて読めません。決して私がバカなわけじゃないんですよ？
単にこの文字が解読の困難なものってだけなんです。
その本を戻して、再び本棚に目を凝らします。

「あ」

一冊だけ、他の難しそうな本とは違い薄っぺらくて色の異なる本がありました。
これなら読めるかもと思い、その本を抜き取りました。
表紙は女の人でした。
下着姿の女の人です。
下着のカタログかと思います。

女物なのは多分、ムーラさんが購入しようとしていたのだと思います。
何かいいやつがあるかもなので中身を開いてみます。
「……」
こ、これは下着のカタログではなかったです。
何かもうアレでした。
ふるふる震えが止まりません。
「あの魔王は、へんた」
「誰が変態だってこのガキ」
「ひえ！？」
背後から頭に一撃、強烈なのを喰らって、頭を抱えしゃがみ込みました。
見上げるとその場にいたのは、シオールです。
「その本は俺のじゃないから」
「アンタしかいないじゃないですか！」
「あのさ、俺がそんなの買うような奴に見える？」
「見えます見えます」
「黙らせてあげようか？」
「むぐぅ！」
ホントに黙らせられました。
口を塞がれて息ができません。
コイツ、やる気です。
私を殺してこの情報が漏れるのを防ぐつもりなんです。
と思ってたら、ぱっとシオールが口を塞ぐのをやめました。

「とにかく、俺のじゃないよ」
「じゃあ誰のだって言うんですか！」
今だ疑う私に対してシオールは呆れ顔で告げます。
「弟のだよ」
「弟？」
「うん。女好きでさ」
「弟がいたんですか」
女好きの弟ですか。
顔が見てみたいです。
コイツの弟とか一体どんな奴なのか一向に予想できません。
「ところで」
「な、何ですか？」
「俺、本当は気づいてたよ」
「え？」
いつになく真剣な表情で言うシオールに対して、意味が分からず首を傾げます。
一体何が？
気づいてたって？
目をぱちくりさせていると、シオールはさらに続けます。
「君が本物の王女じゃないってこと」
目を丸くして、次の瞬間叫びました。

「えええええ！？　き、気づいてたっていつから！」
「最初から」
「さ、最初……？」
「初めて会った時。さらう直前」

それは、つまり偽者だと分かっていてさらったと？
でも、それはおかしくないですか？
偽者だと分かっていたなら、なぜ本物を探さずそのままさらったんですか？
その疑問を解決するため質問します。

「確かめるためだよ」
「？」
「設定が変えられるものなのかを。結果、君をさらうことができた。それで設定は変えられることが分かったんだ。俺も勇者に倒されるとか嫌だし」
「勇者を倒すんですか？」

質問を投げかけると彼は、こちらを見てしばらく沈黙した後、珍しく笑顔を浮かべました。
喜んでる笑顔ではない気がしました。

「君はどっちに勝ってほしい？」
「それは……」

以前の私なら、間違いなく勇者に勝ってほしいと言ったはずです。
けど、今は分かりません。
少なくとも、シオールもひどい奴じゃないんです。
この魔王城に来てからひどいことは何もされませんでした。
閉じ込められることもなく、自由に生活できてます。

いわゆる放置状態なのかもしれませんが、ほんの少しでも優しさを感じずにはいられません。
もちろん、悪口を言われて腹が立つことは多かったんですが。
シオールが負けて、消えてしまってもいいとは思えないです。
でも勇者に負けろというのも。
せっかく探してくれてるわけで。

「ひ、引き分けとかでいいじゃないですか！」
「引き分け？」
「そうですよ。それなら、誰も消えずに済みます」
「君ってつくづく変な子だね」

そう言い、シオールは腹を抱えて笑います。
イラっときたので頭を叩きましたが効果はないようです。
何なんですかコイツは！
人が真剣に話してるっていうのに。
笑うのをやめてシオールは、次に苦笑いを浮かべます。
ここまで表情がコロコロ変わるのは今日が始めてです。

「引き分けは難しいかな。俺は、勇者には負けたくない」
「それは、やっぱり勝ちたいんですか？」
「まあ、単に勝ちたいってのもあるよ。それに」
「それに？」
「……何でもない」
「な、何なんですか！　理由を」

さらに聞こうとするとシオールは怒りました。あから

「何でもないって言っただろ！」
「……」

私は黙りました。
何かよっぽど聞かれたくない理由だったみたいです。
「……いや、怒鳴って悪かったよ」
「え？」
突然シオールの態度が変わり、謝ってきます。
いきなり何が？
「だから、泣かないでくれる？　厄介だから」
自分が泣いていたことに気づきました。
涙が頬をつたっていました。
急いで服の袖で拭きます。
まさか、私がコイツに怒鳴られたぐらいで泣くなんて信じられません！
何でこんなことに？
「し、失礼します！」
そう言って、書庫を出ました。
廊下に出るとムーラさんが立っていました。
「マコ様、大丈夫ですか？」
「大丈夫ですよ！　でも、私は泣き虫にでもなったんですかね……」
「違いますよ。新しいものです。きっといいことが起こります」
ムーラさんは、花のように愛らしい笑顔を浮かべてタオルを差し出してくれます。

新しいもの、とは何か分かりませんでした。

ｇｅｍｅ８

黒い枠の大きな窓の向こうに、まぶしいブルーの空が覗くなか、シオールの部屋のテーブルで本を読んでいました。
向かい側にはシオールが本をパラパラ捲っています。別に読んではいなさそうです。
何の会話もないまま黙々と本を読んでいると、不意に扉をノックする音が部屋に響き渡りました。
ゆっくりと扉が開き、オレンジジュースを乗せた銀のトレイを持ったムーラさんがやっぱり可愛らしい天使のような笑顔で入って来ました。

「こ、こんにちは」
「おはようございます、マコ様」

そう言えば、今は朝でした。
こんにちはっていつでも通用すると思いますし、大丈夫だとは……。
ムーラさんは丁寧な仕草でオレンジジュースをテーブルに置くと、ぺこりとお辞儀をします。
そして何か思い出したように口を開きます。

「あ、今日はシガル様が帰って来られるそうですよ」
「シガル？」
「シオード様の弟ですわ。シオール様とは正反対でとても愛想の良い方です」
「ムーラ、それは俺にケンカ売ってると見ていい？」
「ケンカなんて売ってません」
「あ、でも、シオードの弟って言うと、昨日言ってた……？」

不機嫌そうにテーブルに肘をついたシオールは黙って頷きました。
あのエロ本の持ち主ですか。
愛想が良いとは言っても、あんな趣味があるって考えると複雑です。
どうなんでしょうね？

「うん、あの本のね」

やっぱりそうだそうです。
そして、シオールはさして興味もなさそうにオレンジジュースのコップを持ちながら呟きます。

「あれは、髪が長くて巨乳で美人なのが好きだから」

……私とは正反対なタイプが好きだそうです。
何か複雑な気持ちですが、私は心配ないということらしいです。
別に、悲しくはないですよ。
そんななか、ムーラさんが笑顔で言い放ちます。

「そしてシオール様は、髪が短くて貧乳で可愛らしい子が好きなんですよね？」
「ムーラ、黙りなよ？」

可愛らしい意外の、髪が短くて貧乳なら私に当てはまっていますが。
兄弟なのに好きなタイプは正反対みたいですね。
シオールは、機嫌悪そうな表情で立ち上がると、ベッドに潜り込んでしまいます。
機嫌悪くなったらベッドに潜るのは魔王のやることですか？

何か違う気がします。
何と言うか、シオールは魔王なのにあんまりそんな感じがしないんです。
魔王らしさに欠けるというか、威厳がないというか……。
とりあえず寝るのを邪魔するわけにはいかないので、部屋を出ました。

相変わらず長い廊下を歩いていると、一冊の本が落ちていました。
落し物でしょうか？
黒いカバーのついた本のタイトルは――あ、これは私も好きな本です。
あんまり人気ないようだったんで、同じものを読んでる方がいて嬉しいです。
でも、誰が落としたんでしょうか？
ムーラさん、は本を落とすようなヘマはやらかしそうにないですね。いつも何十個もの食器を笑顔で運んでたりするぐらいだから。
とすると――。

「あ、そこの」

メイドの少女を引き連れた青年が声をかけてきました。
漆黒の髪を後ろで束ね、戦士用の軽装を着た長身。メイドの方は、きっちり切り揃えられた黒髪の美少女です。

「それ、その本。俺の」

彼は、本を指差して言います。
どうやら彼がこの本の持ち主らしいです。
本を差し出して、とりあえず笑ってみました。
同じ本を読んでる人がいるんです。これ以上に嬉しいことはないですよ。

「この本、私も好きです」
「え？」

彼は目をぱちくりさせています。
まあ、あんまり人気のない本なので珍しいのかも。

「マコさまー」

遠くからムーラさんの声が聞こえました。
というわけで、行きます。

「じゃあ、失礼します！」

ぺこりと頭を下げて、ムーラさんの声がした方へと向かいました。

「……まさか、俺と同じ趣味の女の子がいるとは」
「随分マニアックだね」
「男ならともかく、女の子がこれを」
「×××とかね。てか、カバー偽装って意味あるの？　中身見ちゃえば何の本か分かっちゃうじゃん。シオール様に怒られちゃうよ？」
「これを好きな女の子がいるなんて、運命なのか？」

何か話し声が聞こえてきましたが、よく聞こえませんでした。
まあ、私には関係ないないと思いますが。

ムーラさんによって再びシオールの部屋に連れて来られた私は椅子に腰掛けていました。
どうやらシオールの弟を紹介いてくれるっぽいです。
ベッドに腰掛けたシオールは、呆れたように呟く。

「わざわざ紹介する必要もないのにね」

一人ごとみたいなんで、返事はしません。
しかし、どんな人なんでしょうか？
やっぱり気になってしまいます。
そうしている内に、ノック音が響き扉が開きます。
笑顔のムーラさんが引き連れて来たのは、先ほどの青年とメイドさんでした。

「この方がシガル様です。で、そちらがメイドのリノですわ」
「あ、さっきの」

シガルさんも気づいたようです。
この方がシオールの弟？
今、とんでもない違和感を覚え中です。
シガルさんは、長身でシオールよりも背が高い……どう見てもシオールの方が弟に見えてしまいます。

「兄じゃ……？」
「俺が弟に見えるとか言いたいの？　まあ、別にそんなに怒らない

けど。後で縛り上げるからね」
「怒ってる！？」

危ないところです。
余計なことは言ってはいけませんね、やっぱり。
本人は弟より小さいことを気にしているんでしょう。

「ところでムーラ、この子は？」
「王女のマコ様です」
「王女か。なるほど」

と言っても偽者なんですけど、それは秘密なんです。
いや、一応王女であることに変わりはないんですけど。
シガルさんは確かめるように聞いてきます。

「さっき会ったのは、間違いないよな？」
「はい」
「じゃあ、これを」

手渡されたのは、男の人が用意したとは思えないピンク色でハート柄だらけの手紙でした。

ｇｅｍｅ９

シガルさんにもらった手紙を開けてみました。
なかには便箋が一枚……取り出そうとした瞬間にシオードに手紙を取られました。

「シオール、何するんですか！？」
「検閲だよ検閲」

便箋を取り出したシオールは、それに目を落とします。
わずか数秒でした。
なぜか便箋が赤い炎で燃え上がり、チリのようになってしまいます。

「な、何してるんですかぁっ！？」
「ごめん。ちょっとした手違いで」

手違いで燃やしちゃったんですか？
これじゃあ、手紙の内容が分からないじゃないですか！
てか何で燃えるんですか？　魔王なら流石に力の制御はできますよね？

「ま、いいんじゃない？　大した内容じゃなかったし」
「あ……兄貴、いくら何でも燃やすことは……」

シガルさんは、ふるふる震えながら言います。
自分の書いた手紙を燃やされて気分が悪くならないはずがありません。

「ま、まあ、いいよ。手紙意外でどうにかする」
「せっかく書いたのにねー。ボクが手伝ってあげたのに」

リノがにこにこ笑いながら言っています。
手伝うって、一体どういう手紙だったんでしょうか？
ますます気になります。
それにしても、見るところリノはシガルさんの専属メイドか何かなのでしょうか？

「あ、もうこんな時間か。じゃ、また！」

シガルさんは時計を見ると慌てて部屋を出て行きました。
何か用事でもあるみたいです。
リノもぺこりと頭を下げるとシガルさんの後を追って駆けて行きました。
開きっぱなしになっていた扉をムーラさんがゆっくりと閉めます。
彼女はシオールに向き直ります。

「なぜ、先程手紙を燃やされたんですか？」
「誤作動だよ」
「アンタは何の機械なんですか……」
「誰が機械だって？」
「な、何も言ってないです」

しかし手紙を燃やした人なんて初めてみました。
さらに自分宛てではなく、他人宛てのものを燃やすなんて……。
ついでに手の上で。
熱くないんですかね？
まあ、魔法を使った本人は熱くないんだと思います。
それにしても、手紙の内容が気になります。

シオールに聞こうにも、今、大した内容じゃなかったと言ってたし、詳しく教えてくれそうにはありません。

「あ」
「どうしました、マコ様？」
「いや、何でもないです」
「？」

シガルさんに直接聞けばいいんじゃないですか！
手紙をくれたのはあの人なんですし。
今度聞いてみることにします。
今日は多分無理でしょう。
何か用事があるみたいですし。

「ところで」
「何ですか？」
「君は勇者を見たことはある？」
「ないです」

《設定》で勇者が世界を救うことは知っていても会ったことはありません。
何せ、勇者が城を訪れるのは王女がさらわれた後だと決まってますから。
私は顔を上げ、シオールに質問します。

「シオールは会ったことあるんですか？」
「ないよ」
「ないんですか？　ま、まあそうですよね。魔王と勇者が会うのは最後だと思います」
「勇者様もきっとかっこいい方に違いありませんわ」

ムーラさんが花のように愛らしい笑顔で告げます。
勇者は、多分かっこいいと思います。
やっぱりかっこよくないとダメですよね！
シオールは椅子に腰掛けて、余裕ありげに呟きます。

「まあ、俺よりは下だろうけどね」

勇者より自分の方がかっこいいと言いたいんですかコイツは。
何て自信過剰な。

「自信があるっていいですね？」
「何が言いたいの？」
「私は、姉様みたいに可愛くないし……」

いつも気にしていました。
何もかも姉に劣る。
そして、ほんの少しでも姉に嫉妬してしまう自分を恥ずかしく思います。
自分の大事な姉に対してそんな感情を少しでも持っているのが。
シオールは、しばらくこちらを見て淡々と告げます。

「そこそこ可愛いと思うよ？」
「え？　な、何を……言ってるんですか……」

顔が熱くなってきました。
恐らく、私の顔は真っ赤に染まっているんだと思います。
何せ可愛いなんて言われたのは初めてで……。
うろたえる私に対し、シオールはさらに付け加えます。

「――顔はね」
「顔だけですかぁっ！」

つまり中身は可愛くないと言いたいわけです、コイツは。
いや、もう可愛いと思われるような態度は一切取ってないんですけど！　むしろ恨みを買うような態度は頻繁に取りましたけど！

「ま、胸の大きさも可愛いって言えるよね」
「何てこと言うんですかぁっ！」

流石に部屋を飛び出しました。

ｇｅｍｅ１０

城の中庭には赤いバラの花が大量に咲き誇っていました。
その美しさの反面、若干恐ろしさも感じてしまいます。
私は、中庭の中央に配置されているテーブル前の椅子に腰を降ろしました。
テーブルに突っ伏します。
それにしても、性格ですか。
確かにシオールの言う通り、可愛くないのかもしれません。
ずっと自分とは全然違って完璧なレシャーナを見て、嫉妬したり諦めたりしたところがあったんで、その内に性格もひねくれてしまったんでしょうか？
その可能性は十分にあります。
自分でもそんな気がします。
いつもにこにこ笑ってたりできないし、気付けば無愛想な顔になってるし……。
意図的に笑おうと思っても。
……にやり。

「……」

もう頭を抱えるしかありませんでした。
笑顔もまともに作れないなんて。
ホントにまずいかもしれません。

「マコ様」
「ムーラさん」

聞き覚えのある声が聞こえ、振り向くとその場に立っていたのは

ムーラさんです。
ムーラさんはいつも通り花のような笑顔を浮かべています。
どうしてこんなに自然に笑っていられるんでしょうか？
私からしてみれば、笑うのは難しいことですが、ムーラさんには簡単なことなのかもしれません。
それを考えると羨ましく思います。
本当に。

「どうしましたか？」
「やっぱり私って、可愛くないですよね？」

外見云々以前に立ち振舞い自体問題だと思います。
よく笑う人の方が他の人も一緒に居て気分が良くなるはずです。
私みたいなひねくれ者といたって楽しくなんか。
ムーラさんは微笑みます。

「大丈夫ですよ、マコ様」
「はい？」
「シオール様が口で言ってるほどマコ様はひどくありませんわ」

べつに直接性格が悪いって言われたわけではないんですけど。
顔のみ可愛いという言い分で……。
でも、そう言ってもらうと少し安心します。

「そうですかね？」
「そうです。シオール様はつい人を傷つけるようなことばかり、おっしゃってしまいますが本当はとてもお優しい方なんです」

ムーラさんは、顔が少し暗くなりました。
いつもの愛らしい笑顔とは違い、憂いを帯びた表情です。

「魔王だということで、魔王として……人に嫌われるような――そういう者になろうとしているんですよ、あの子は」

あの子？

何だか今のムーラさんは、子供のことを心配する母親のようです。

いや、実際すごく失礼なこと考えてるかもしれませんけど。

老けて見えるとかそう言うんじゃなくて、母親のような優しさを感じるというわけでして……。

「でも、本当は嫌われるの好きじゃないんですよ、シオール様は。普段の言動や態度がアレですから嫌われやすいとは思いますけど、本当はそうじゃないんです。だから、マコ様もシオール様のことを嫌いにならないであげてくださいね」

ムーラさんは私の手をそっと握ると、にっこり微笑みました。

「嫌いには、なりませんよ」

多分、嫌いにはならないと思いました。

ムカついたりはしますが、嫌いというわけではないんです。

すっかり日が沈み、窓越しには暗い闇にキラキラを光を発する星が散りばめられた幻想的な世界が展開していました。

そう言えば、この魔王城から外に出ることはできないので直接外へ出て夜空を眺めるなんてことはできてないです。

城に居た頃もあまり外へは出られなかったんですが、テラスなんかから見た記憶があります。
ふと、ノック音が耳に入りました。
ムーラさんですかね？
ノック音が聞こえただけで、扉が開く様子がなかったので自分で開けました。

「あ」

そこに立っていたのはシオールでした。

「な、何の用ですか？」
「ちょっとついて来てくれる？」
「え？」
「いいから」

目をぱちくりさせていると、腕を引かれました。
うっかりバランスを崩しそうになって非常に恥ずかしかったです。
廊下へ出て、階段を降ります。
廊下も階段もとんでもなく長いんで、ひどい重労働です。
息切れしそうな勢いで。
一階まで降りると、シオールは城の入り口である巨大な扉を開きます。
その途端、外の冷たい空気が流れ込んできて、思わず身震いしました。
そのまま外へ出ました。
外は、意外なことに草原でした。
てっきり毒の沼地なんかを想像していたんですが。
月光を浴びた草が、淡く輝きを放っていて神秘的な光景でした。
しかし、冷たい風が頬をかすります。まるで真冬のような寒さで

す。
息を吐くと白く濁って夜風にさらわれて行きます。
「こ、こんな寒い時に連れ出すなんて、アンタは鬼ですか！？」
「ちょっと黙ってくれる？」
「うぐ」
うるさいってことですか。
「上、見なよ」
「は？」
目に映ったのは、ただの星空です。
何も珍しくもありません。
「何なんですか？」
「ちっ、人の好意も気づかないのか」
舌打ちされてしまいました。

gem11

シオールの言葉に対して、まだ分からなかった私は首を傾げました。
さらに不機嫌そうな顔になるシオール。
まずいです！
何とか理由とやらを突き止めなければ。
しばらく思考を巡らせ、

「あ、もしかして星空を見せたかったとかですか？」
「勝手に解釈すれば？」

てかコイツがそんなロマンチストだとも思えないんですが……。
どうなんでしょうかね？
でも、多少の良心はあるみたいです。
上を見上げると、今だ真っ暗な空に星の光が瞬いています。
なぜか夜空がすごく近い場所にあるように感じられました。
手を伸ばせば届きそうとまでは、いかないんですが……それでも近くに感じられます。
やはり外だからでしょうか？
建物のなかからだと、逆にすごく遠く感じます。
シオールの様子を伺っています。
普通でした。
普段を対して変わりません。
特にこの光景に感動する様子もなく、表情も変化しません。
こういうもの、なんでしょうかね？

「でも、何で急に外へ出してくれる気になったんですか？」
「気まぐれだよ」

「気まぐれ？」
「そ、気まぐれ」

シオールの返答はあっさりしたものでした。
特に特別な感情がこもっている様子は一切ありません。
今、思えばシオールはあまり感情を読み取ることができない相手なんです。
表に出さない。
表に出していなくとも、何か考えているんでしょうか？
……考えてはいるでしょう。
生き物というのは、常に何かを考えているものです。
なぜか、彼がいつもどんなことを考えているのか知りたくなりました。
別に知って得るものはないと思うんですが、興味が湧きました。
魔王というだけで、十分に興味の対象なんです。
魔王とは、普通の人間とは違った何かを持っている気がしてならないんです。
質問したところで、彼は何も教えてくれないのは分かっているので、いちいち口には出しません。
出したら、どうなることか。
怒り出す可能性もあり得ます。
まあ、どうしても知りたいわけでもないんで、いいんですが。

「むぎゃ」

いきなりほっぺをつねられました。
理由は分かりませんが、とにかくほっぺが痛いです。
何なんですかこれは。
女の子をいじめて楽しいですか？
何でほっぺなんですか？

ほっぺは結構痛いんですよ？

「何するんですかぁっ！」

流石に耐えられずに、シオールの手を振り払いました。

「別に。ぼーっとしてるなぁと思って」

「ぼーっとしてたら、つねられるんですか？」

「知らないよ。もうなかに戻るよ、じゃ」

連れて来ておいて、置き去りだそうです。

責任感も何もないですね。

てかホントになかへ向ってるんですけど！？

ホントに置いて行くんですか！

王女が逃げ出さないかとか、そういうの一切気にしてないんですね。

多分、この魔王城から逃げ出すのは、鬼ごっこの鬼から逃げるより簡単な気がします。

仮に逃げ出しても追って来ないと思います。

「って待ってください！」

私は慌ててシオールの背中に突進しました。

不意打ちを喰らい、流石のシオールも倒れました。私のそのまま倒れます。

しがみつく程度で良かったと思います。

失敗しました。

当然の如く押しのけられ「ぷぎゃあ」と何とも言えない声を出してしまいました。

シオールは、地面に手をつけこちらを見下ろします。

その体勢はやめてください。

「ま、待ってください！　私はまだ処女なんですよ！？」

「バカも大概にしなよ。誰が君みたいなぺたんこ」

パコンと聞くにはいい音が響きます。

頭を叩かれました。結構痛いです。

シオールは不機嫌そうな表情で質問を投げかけてきます。

「で、なに？　突進して俺を葬ろうとでも思ったの？」

「違いますよ！　暗いとこに置いて行かれるのダメなんですよ」

「それは、どうして？」

その質問に答えるか否か迷いましたが、

「……お、おばけが出たらどうするんですか」

「ぷっ」

シオールが噴出しました。

腹を抱えて笑うシオールに怒りを覚えましたが、普段あまり表情を変えないことを思うと悪いことではないのかとも思いました。

どんだけ笑ってたのか、弱冠目の端に涙が浮かんだ状態で面白そうに言います。

「普通は魔王の方が恐いと思うけどね？　おばけが恐くて魔王にしがみつくとか、お笑いじゃないか」

確かに、普通は魔王の方が恐いと思います。

けど、シオールは恐さを感じさせないんです。

何ででしょうか？

不思議でたまりません。

gem12

暗くなった廊下を歩いていました。
シオールの五歩後ろぐらいの距離を維持しています。
なぜ五歩後ろなのかというと、隣に並ぶのは何だか困るからです。
特に共通の話題があるわけではないので。
なら、さっさと別れて自分の部屋へ戻ればいいんですが、この城は広くて迷いやすいんです。
さらに夜となれば、余計にです。
しばらく無言で歩き続けます。
歩き続けていると、前方から足音が聞こえてきました。
規則正しい音。
目を凝らしましたが、まだ少し遠い人影の正体この暗闇では掴めませんでした。
相手は間違いなくこちらに近づいて来て、立ち止まります。

「あ、ムーラさん」

足音の正体はムーラさんでした。
ムーラさんは、にこりと微笑みます。

「お二人とも、何をなさっていたんですか？　部屋を覗いたらいないので、心配して探し回ったんですよ？」

ムーラさんは、こんな夜にわざわざ探してくれていたようです。
使用人というのは大変そうです。
絶対、寝るのも遅くなりそうですよね？　それに、朝は朝食の準備とかあるでしょうから早く……。休む暇はほとんどなさそうです。
私だったら、絶対できません。

「ええと、お二人とも、もうお部屋に戻りますよね？」
「はい、戻りますよ」
「では、ご案内致します」
「あ、俺は一人で戻れるからね」

シオールの言葉にムーラさんは一瞬、迷うような素振りを見せた後、にこりと笑います。

「では、行きましょうかマコ様？」

返事をしようとした途端にお腹が鳴りました。

「もしかして、お腹が空いてらっしゃるんですか？」
「……そうとも言います」

晩ご飯、ちゃんと食べてなかったとかそういうわけじゃないんですよ？
私は生活習慣は正しいですからね！
かと言って、晩ご飯を食べたにも関わらずまだ食べたいって大食いでもないんですから。

「よろしければ、何かお作り致しますが？」
「あ、じゃあお願いしていいですか？」
「何がいいでしょうか？」
「ラーメンとビビンバを……」
「かしこまりました」
「君は、こんな時間にそんなに食べるの？」
「うぐ」

シオールに言われ、唸ります。
スープ程度ならこの時間帯でも普通でしょうが、よく考えればラーメンとビビンバは結構なボリュームがありますし、夜中に食べるようなものではないでしょう。
でも、しょうがないじゃないですか。
食べたいんですから！
シオールはため息をつき、

「全く、太っても知らないよ？　あ、俺はカレーうどんと親子丼で。親子丼は鶏肉抜きで」
「あんたも食べるんですか！？　あと、親子丼の鶏肉抜きだともう親子じゃないですよ？　ただの卵丼なんです！」

人にそんなに食べるのかとか言っておきながら、自分も結構頼んでるじゃないですか。
カレーうどんも親子丼もボリューム満点ですし。
でも、何で鶏肉入れないんでしょうかね？
おいしいのに。
親子丼の親子の意義も失われてしまいます。

ムーラさんが素早く作ってくれた料理をシオールの部屋で平らげた私は、机に突っ伏しました。
流石にお腹が苦しいです。
ラーメンとビビンバは、ちょっと量が多すぎました。
ムーラさんが愛情込めて作ってくれたので残すような真似はして

いません。
すごく美味しかったので、お腹が限界を超えても詰め込むことができました。
お腹もおきたところで、そろそろ眠くなってきました。
いきなり頭を叩かれました。
コツンという音がして、私は頭を抱えます。

「何するんですか！」
「ここで寝ないようにね」
「うぐ」

確かに眠ってしまいそうでした。
机の上で寝るなんてことは、気持ち良く眠れないからダメです。
でも、すごい勢いで眠気が襲ってきます。

「くー」
「このガキが。ここで寝るなって言ったのに」

目を覚ますとベッドの上でした。
いつもとは違う、黒いベッドです。
ふかふかの布団は気持ち良くて、このなかから出たくないです。
あれ？
慌てて起き上がりました。
周囲を見回すと、悪趣味な置物や黒い家具が目に入ります。
天井に見えるのも黒いシャンデリア。
シオールの部屋じゃないですか！

結局、寝てしまったようです。
ふと、床でシオールが布団を被って眠っていました。
これ、まずいんじゃないですか？
私がこの部屋で寝たから、ベッドが使えなくてってパターンですよね？
怒ってますよね？
とりあえず、目を覚ます前にここから出るしか……。
ベッドから降りると、そーっと部屋を出ようとしましたが、背後から襟首を掴まれました。

「ここで寝るなって言ったよね？」
「し、仕方ないじゃないですか！　眠かったんですから……」
「……まあ、いいや。俺、今から寝るから」

あっさりと許してくれました。
シオールは布団のなかに潜りました。

「今から寝るんですか！？　朝ですよ？」

何かおかしいですよね？
そう言えば、さっきの様子もいつもと比べて元気なかったような？

ｇｅｍｅ１３

ベッドに潜り込んだシオールに対して尋ねます。

「風邪ですか？」

魔王って風邪引くんでしょうかね？
よく分かりませんが、朝から寝るなんてニートじゃあるまいし……。

返事がありません。
既に眠ってしまったんでしょうか？
こんなに早く眠ってしまえるものでしょうか？
……もしかして、寝たフリですか？
寝たフリをして無視を決め込んでるとか、そういうことかもしれないです。

「シオール？」

とりあえず布団を引っ張ってみます。
そしてもう一度尋ねます。

「風邪ですか？」
「昨日、床で寝たせいでね」
「……すみません」

どうやら私がこの部屋で寝たのがいけなかったようです。
寒い夜に床で寝たりなんかしたら、風邪を引きますよね。
はい、これからは気をつけようと思います。
それにしても、自分のせいで風邪を引かれてしまったと分かると

罪悪感が胸の内からこみ上げてくるんです。
何か、何かしなければ。
でも、何をやればいいんでしょうか？
一応は王女ですから、父様や姉様が風邪を引いても使用人が看病していたので、病人には何をしてあげたらいいのか分かりません。
そう言えば、風邪を引いた時は暖かくするといいとか聞いた気がします。
物入れから、布団を毛布を大量に取り出します。
こんなにあるとは……十枚はあると思います。
でも、暖かくするには数が多い方が助かります。
布団をどんどん重ねていくと、シオールが不機嫌そうに制止しました。

「待ちなよ、いくら何でも多すぎだよ。重いから」
「へ？」

確かに十枚もあると重そうです。
病人はただでさえ、弱ってるんで重さには耐えられない可能性が高いです。

「じゃあ、二枚ぐらいで」
「それで十分だよ。てか君バカなの？　バカなんだね？」
「バカじゃないですよ！　看病の仕方を知らないだけですっ！」
「ふーん」

シオードは起き上がります。

「だ、大丈夫なんですか？」
「大丈夫だよ。別に風邪じゃないし」

「え？」
「だから風邪じゃないから。単に眠かっただけだよ」
呆れ顔で言うシオールに対して目を丸くします。
その状態でしばらく固まっていると、頭を叩かれました。
これはまた痛いです。

「何で叩くんですかぁっ！？」
「ぼーっとしてるからだと思うね」
「思うって何ですか……」

それにしても、本当に風邪じゃないんでしょうか？
まだ顔も赤い気がします。
やっぱり風邪なんじゃないでしょうか？
もう一度、恐る恐る尋ねてみます。

「やっぱり風邪なんじゃないですか？」
「そうみたいだね」

シオールはぼーっとした様子で頷きました。
本格的にまずそうです。
いや、シオールを食べたらまずそうというわけではなく……まあ、まずいでしょうけど。
早く治さないとまずいと思います。
でも、どうやって？
魔王は医者に診てもらったりするんでしょうか？
あれこれ考えているとシオールが口を開きます。

「……だからさ」

「は、はい。何でしょう？」
「……抱き枕になってくれる？」

……ホントにまずそうです。
多分、熱のせいで頭がうまく回ってないんだと思います。
もしかして私のことが、大きなうさぎのぬいぐるみにでも見えてるのかもしれません。
さっさと寝かしつけた方がいいと思います。

「抱き枕とかないですよ。さっさと寝てください。ムーラさんを呼んで来ますから」

よく考えれば、ムーラさんを呼べば良かったんです。
ムーラさんなら、対処法も知っているでしょうし、あの人がいれば万事解決です。
布団を被せようとすると、腕を掴まれ引っ張り込まれます。

「何するんですかっ！？　私は抱き枕じゃないですよ！」
「はいはい、抱き枕は喋らないからね」
「抱き枕じゃないですよ！　ふぎゃ」

いろいろまずいと思うんですが……。
何で抱き枕になってるんですか！
貞操の方は大丈夫ですよね？
大丈夫ですよね？
ムーラさん早く来てください。

「……ちょっとあれだね」
「え？　あ、もしかして……そ、その……」

こんなに身体を密着させているなら、あれですよね？
顔が熱くなっていきます。
やばいです。
これは――――。

「肋骨が当たって痛いよね」
「黙ってくださいーーーーーーーーーーーーー！？」

何で肋骨なんですか。
当たってぷにぷにするほどボリュームもないと。
ある意味傷付きました。
とりあえず、何とか脱出しました。
息を整えます。
風邪って恐ろしいんですね。
本当に。
扉が開く音が聞こえました。

「おはようございます。あら？」

ムーラさんです。
助かりました。

gme14

「あら？　どうしましたか？」

キョトンとした様子でムーラさんは首を傾げます。

「シオードが風邪を引いたみたいで……」

「風邪ですか。それなら大丈夫ですよ。寝ていれば治ります」

ムーラさんは、可愛らしい笑顔を告げます。

寝てるだけでいいんですか？

医者とか呼ばないんですかね？

私は、おずおずと尋ねてみます。

「寝てるだけで大丈夫なんですか？」

「風邪というのは、寝てるだけでも治るものです。病気とはまた違いますし、栄養のあるものを食べて安静にしておけば問題ありませんわ」

「そ、そうだったんですか」

意外でした。

お城では、父様が風邪を引いたりしたら使用人が医者を何人も呼んでくるので相当まずいものだと思ってたんですが、違ったようです。

きっと父様は王様なんで、みんな騒いじゃってただけなんですね。

確かに風邪を引いて死にそうだったことはありません。

「君の知識のなさには呆れるよ」

「なっ」

シオールに言い返してやりたかったんですが、実際何も知りませんでしたから言い返せません。
もう黙るしかありません。
ムーラさんがポンと両手を合わせます。
笑顔で言葉を発します。

「あ、何か作って来ますね」
「あ」

早々に出て行ってしまいました。
残して行かないでください。
相手は現在、人のことを抱き枕と勘違いするほどの奴なんですよ。
何を話せばいいか分からないんで沈黙が続きます。
窓から流れ込んでくる風の音と、壁にかけられた巨大な黒時計の針を刻む音しか聞こえません。

「あのさ」

シオールが起き上がって口を開きます。
さっきのぼーっとした様子とは打って変わって真剣な表情です。

「な、何でしょう？」
「勇者がどんな奴か知りたい？」

思いもよらなかった言葉です。
一体どうしたんでしょうか？

「知りたいですけど、会ったことないんじゃ？」
「あるよ。前、会ったことないって言ったのは嘘」

「そ、そうなんですか」

コイツなら意味もなく嘘をついていてもおかしくないです。
会ったことがあるとは。
魔王と勇者が、話したりしたことあるってことですよね？
そうですよね？

「教えてあげるよ。勇者がどんな奴か」

シオールは、語り始めます。
興味を惹かれました。
やっぱり勇者がどんな人物が気になってたまらないんです。

「ま、俺より下の奴だけどね」
「いやいや、アンタ自信過剰ですよ」

相手は勇者なんですから、結構アレだと思います。
勇者はやっぱり強いだろうし、かっこいいだろうし……そう簡単に下の奴とか言える相手ではないはずです。

「俺は完璧だけど、あれはヘタレだね」
「あの、殴っていいですか？」

何だかムカついてきました。
拳で顔を殴ってみましたが、顔はきれいなままでした。
いや、美形とかそういう意味じゃないんですよ？
殴ったのに、痣一つついてないという意味です。

「じゃあ、会った時のこと話してあげるよ」

ｇｅｍｅ１５

町に来ていた。
多くの建物が立ち並び、人々で賑わい、広大な海が見える港町だった。
風が潮の香りを運んでくる。
何かいいものがないか、探してたけどこの町には魚ぐらいしかない。
市場へと出向き、魚を物色することにした。
大きなものから小さなものまで選び切れないほど多くの魚が並んでいる。
適当に目についたものを選び、購入すると市場を出る。
うん、魔王でも買い物するんだよ？
市場を出るともう用はなく、城に帰るため町を出た。

一面に広がる広大な草原を歩き続ける。
陽光を浴びて光を照り返す草がたまに吹く大きな風でさわさわと揺れる。
気持ち良く歩いていると、何かを踏んだ。
固くもなく、柔らかいわけでもない。
アレじゃなきゃいいけど。
そう思いながら、視線を自分の足元に移す。
人間だった。

「……」

こういう時、どうすればいいんだっけ？
放置で？
通りすぎようとした時、その人間が声を発した。

「た、食べ物……」
「……」

行き倒れた人間を町のレストランまで運ぶのは一苦労だった。
その人間は、レストランに入り食べ物を食べた途端に元気になった。
雰囲気変わりすぎだろ。

「ありがとうございます。もう死ぬかと思ったんですよー」

その金髪金目の少年は、オムライスをスプーンで割りながら太陽のような笑顔を振り撒く。
随分愛想がいいみたいだ。
それにしても、この容姿……。
聞き覚えが。
とにかく確かめることにする。

「あのさ、もしかして君、勇者？」
「はい、そうですよ。エルデンって言います」

あっさりと肯定。
むしろ疑いたくなるほどだ。

「勇者が行き倒れ？」

勇者は何も金に困ってることはないと思う。
いざとなれば、魔物から巻き上げればいいだけの話だ。
けど、返ってきた返事は予想外のもの。

「スライムにやられたんです」
「スライム？　スライムってさ、一番弱いんだよ？」

スライムにボコボコにされる勇者なんて流石にいないと思うけど。

「あのスライムは普通じゃないんです」

勇者は苦笑いしながら肩を竦める。
嘘でもないらしい。
もしかして、クイーンスライムとか？
それなら、普通のスライムと比べて桁外れだしね。

「クイーンだね？　良かったら、倒すの手伝ってあげようか？」
「え？」

自分でも何でこんなこと口走ったのは分からない。
けど、相手はまだ俺の正体を知らない。
どうせなら、正体を知られてないまま何かするのも面白そうだ。

「た、戦えるんですか？」
「君よりは強いと思うよ？」
「そうなんですね。じゃあ、よろしくお願いします」

いやいや、勇者は村人なんかが手伝ってくれるって言っても断るよね？
危険な目には合わせられないとか言って。
断らないのが悪いこととは言わないけど。

「じゃ、じゃあ行きましょう！　多分、二人なら大丈夫です」

勇者が言いながら手に持ったのは、木の棒だった。

「腰にある立派な剣は飾り？」
「飾りかもしれないです」

いやいやいや。
飾りにしたらダメだよね？
何コイツ？
突っ込んで欲しいの？

ｇｅｍｅ１６

とにかくクイーンスライムを退治しに行くことになって再び草原に来ていた。
周囲を見回したけど、その姿は見つからない。
強く照りつける太陽と清い青空が広がって、風の音だけが耳に入ってくる。

「いないか」
「いないですね」

勇者はにこにこ笑顔を浮かべていた。
とても魔物と戦う前には見えない。
いつもこう緊張感がないのかな？
ま、ないんだろうね。

「ところで」
「何ですか？」

不思議そうに首を傾げる勇者。
まさか俺の言いたいことも分からないのか。
勇者は、木の棒を構えていた。
剣ではなく木の棒。

「剣を使いなよ」
「剣は斬れますから」
「いや、斬るんだよ」
「打撃で何とかします」

ダメだ。
何言っても通用しないみたいだ。
しかし、剣は何のためにあるのか聞きたいな。
飾りとか言うんだろうけど。
しばらくその場に立ち尽くしたけど、クイーンスライムは出て来ない。
待つのも嫌になってきた。

「もう帰る？」
「そうですね」

勇者は笑顔で頷く。

「嬉しそうだよね？」
「はい。戦わずに済んだんですから、それに越したことはありません。ほら、誰も傷付かずに済んだんです」
「ふーん。魔物に情けは不要だと思うけど」
「魔物も可哀想じゃないですか？　魔物として生まれたからあんなに暴れるんです」
「そうかな？　魔物の犠牲になった人の方がよっぽど可哀想じゃない？」
「それもそうですけど……」
「変な考えだね」

まあ、戦わなくて良かったのは良しとしよう。
おかげで勇者に手の内を知られずに済んだわけだしね。
知られたところで負けはしないけどさ。

「ありがとうございました。いろいろと。そろそろ次の町に行かなければいけないので……」

君が今頭下げてる相手は魔王だけどね。
それにしても、コイツと戦うのか。
設定上では俺が負けることになってるけど……どうかな。

「と、こんな感じかな」

シオールが話し終えて、私は唸りました。
正直、どういう人なのかはっきりしないと言うか……。
優しい人だということは分かりましたけど。

「ぼやっと分かりました」
「つまりあんまり分かってないんだね？」
「うぐ」

そうですよ。
でも、いい人には違いなさそうです。
いや、勇者が悪い人だったら困りますが……。
シオールが再び口を開きます。

「君はさ、決着が着いたらどうするの？」
「私は……」

決着というと、勇者と魔王の戦いが終わった後ってことですよね？
前なら迷わず勇者のところにお嫁さんに行くと言えましたが、今は。

「分かりません」
「お嫁に行くんじゃないの？」
「よく分かりません。実際どうしたいのか……。よく考えれば私は、ただ設定に縛られるのが嫌だったんです。理由はそれだけで、具体的に何がしたいかは……」
「そうなんだ？」

シオールはため息をつきます。
何でため息をつかれなきゃいけないんですか？
はっきりしない奴はうざいとかですか？
しょうがないじゃないですか！

「じゃあさ、もし俺が勇者に勝ったらさお嫁さんになってくれる？」
「……は？」

思わず目を丸くしました。
思いもよらない言葉です。
え？　コイツのお嫁さんにってことですよね？
なぜ？

「そ、そそそそんなこと……」
「冗談だよ。誰が君みたいなぺたんこ」
「な、何ですかーーーーーーーー！？　バカにしないでください！」

人が慌ててたのにこれは何ですか！

冗談にしてもたちが悪すぎじゃないですか！
腹を抱えて笑うシオールの風邪が悪化してほしいと本気で思いました。
でも、シオールが勝ったらどうなるんでしょうか？
その場合、勇者が王女と結婚するシナリオは消えますよね、恐らく。
世界征服が……？
考えないようにしましょう。

「じゃ、君は俺が負けたら嬉しい？」
「それは……シオールが負けるのは嫌です」

勇者が負けても困るんですけど。
嫌いではありませんから。
もし、負けてシオールが消えてしまうならそれも嫌です。
もちろん勇者が消えるのもダメです。

「ちょっと縛り上げていい？」
「何で怒ってるんですかぁっ！？」

シオールにとって嬉しい回答だったとは思いますが！
なぜ怒ったんですか！

「マコ様、怒ってはいませんよ。可愛くても縛り上げるのが普通です」
「いや、その……」

いつの間にか、食事を運んで来ていたムーラさんが笑顔で言います。
普通じゃないですよね！？

怒っても普通縛りませんよね！？
普通の定義がおかしいですよね？

「てか、ムーラさんとシオールって少し行動というか……何かが似てる気がするんですが」
「それはもう、育ての親みたいなものですから」
「え？」

ムーラさんはどう見ても十代後半ですよね？

gem17

「む、ムーラさんが育ての親ですか……」
「はい、そうですよ」

ムーラさんがシオールの育ての親みたいなものという言葉には度肝を抜かれました。
だっておかしいじゃないですか？
ムーラさんはどう見ても、十代後半ぐらいに見えますしシオールが小さい頃から世話をしていたなんてことはないと思います。
お姉さんあたりがいいところだと思います。
混乱する私に対して、ムーラさんは可愛らしい笑顔のままシオールの布団を整えたり飲み物を用意したり、果物を剥いたりとてきぱき仕事をこなします。
恐る恐る、尋ねてみます。

「あ、あの、ムーラさんはいつからこの城に……？」
「百二十八年ほど前からになります。先代魔王様が生まれる前ぐらいからでしょうか」
「えっ？」

百二十八年前って何ですか！？
大雑把に百年前とでも言われれば、多少疑えたんですが数字が無駄に細かいので、あながち嘘ではなさそうです。通常なら、そんなことはあり得ません。
仮に百年以上生きていたら今はもう、おばあさんのはずなんです。
けど、ムーラさんが人間ではなく多種族なら話は別です。
人間の寿命は八十年から百二十年程度と言われていますが、他種族……ムーラさんが何の種族かは不明ですが夢魔や妖魔など寿命が

極端に長く、歳をとっても外見も若いままの種族も存在します。
そういう種族なら、この話もおかしくはありません。
あれこれ考えているなか、シオールが口を挟みます。
「ムーラは鉄天使（アイアンエンジェル）なんだよ」
「鉄天使ですか？」

聞いたことのない種族だったので、首を傾げて説明を求めました。
普通の天使なら知ってるんですが。
シオールは、ムーラさんが剥いた果物をかじりながら淡々と話します。

「普通の天使は回復魔法に特化してるけど、鉄天使は接近戦とかに向くんだよね。鉄ってつくだけあって力も相当すごいし、動くスピードも速い。あと、寿命は千年ぐらいだったかな？　見た目も死ぬまで若いままとか」
「せ、千年ですか」

それなら、シオールのお父さんが生まれる前からここにいてもおかしくないです。
確かにムーラさんは異常なほど仕事が素早いですし、重い荷物だって軽々と運んでいます。それに、いろんなことを知っていますし。
シオールの育ての親というのも間違いではなさそうです。
じゃあ、シオールのこの人格はムーラさんの影響で……？
いえ、ムーラさんの態度とシオールの態度は全くの別物です。もし、ムーラさんの影響を最大限に受けていたなら、シオールはいつもにこにこして優しくて礼儀正しい少年に育っていたでしょう。
それそれで、恐ろしい気もしますが。
「シオール様に気に入らない相手は縛るべきとも教えましたし、可

愛い相手も縛るべきとも教えました。その教えのかいあって、立派に育ってます」
「あの、変なことは教えちゃダメだと思うんです……」

シオールが縛り上げるとか口走るのは、ムーラさんの教えのせいみたいです。
ムーラさんは、愛想良くて優しいんですが何か普通とはズレてますよね？
ズレてますよね！？
シオールがひねくれて育ったのも案外ムーラさんの育て方が問題だったり……？
って何て失礼なことを考えてるんですか私は！
ムーラさんはすごくいい人なんですよ！
でも、縛ったりするのは……。

「縛るのは教育だってさ」

シオールが呟きます。
いや、そんな教育なんてありませんよ？
縛って何の教育するんですか？

「あ、正しくは調教ですよ」

思い出したようにムーラさんが付け加えます。
余計まずくなった気がしてなりません。
ムーラさんは何を教えているんですか？
聞きたいような聞きたくないような……。
……聞かないことにします。

「そういう教育はよくないと思うんです……」

「そうでしょうか？　縛るのは楽しいと思いますよ？　マコ様もどうですか？　あ、でもマコ様は縛るより縛られる方が」
「どっちも嫌ですよ！？」
「縛っていい？」
「何で怒ってるんですかぁっ！？」

シオールが怒るようなことは言ってないんですが。
そのはずです。
てか、シオールはもう風邪治ったんですか。
普通に果物かじってますし、辛そうな様子も一切ありません。

「縛るのは普通なんですよ？　一般常識です」
「え？　そ、それは……ないんじゃないですか？」

多分ムーラさんのなかでは一般常識なんですよね？

gem18

とりあえず私は勇者様のお供として旅に出ることになった。
お父様も何とか許してくれて、無事にスタートできた。
私も、戦うんだから。

城を出たその先には、果てしない草原が広がっていた。
太陽の明るい光を浴びて輝く草原の草花は思わずきれいと思ってしまうほどの美しさを持っている。
これ、これよ。
私が求めていたのは。
城のなかでは、見ることができない光景。
緑色の森や草原。
はるか彼方まで広がる蒼い空。
こんな大自然を冒険してみたかったのよね。
……もちろんマコを助けに行くことは忘れてないわよ？
ちゃんと考えてるんだから。
冒険さえできれば、何でもいいってんじゃないわ。
本当なんだからね？
私の前方を歩くのは、勇者様。
魔王を倒す救世主。
まだ私と対して年齢もかわらなそうだけど、それでも魔王を倒してしまえるほどの力を持っているなんて……正直、信じられない。
とりあえず旅を始めて分かったのは、勇者様は思ったよりマイペースだってことぐらい。
肝心の実力はよく分からないのよ。
じっと勇者様の後ろ姿を見つめていると、不意に勇者様が振り返る。
私は慌てて視線を逸らす。

用もないのにじっと見てるとかおかしいからね！

「レシャーナさん」

「何？」

「疲れてませんか？」

「疲れたから休みましょう」

私は迷わず答える。

勇者様はにっこりと笑う。

「疲れてないようですね。もう少し頑張りましょう」

一瞬、殴りたくなったんだけど！？

あの爽やかな笑顔を浮かべる顔にパンチをめり込ませてやりたくなったんだけど？

この人、私の言葉聞いてたのかしら？

聞いてないわよね？

だって私、疲れたから休もうって言ったんだから間違いないわ。

「あ、鳥がいますよ」

「いないんだけど？」

「あれです」

勇者様がぽわぽわした笑顔で指差したのは、こっちを忌々しそうに睨む鳥型の魔物だった。

いやいや、確かに鳥だけど！

鳥ですけどね！

「勇者様、あれは魔物じゃない？」

「可愛いじゃないですか」

「どこが！？」

こっちを睨んで今にも襲いかかってきそうなアレが可愛い！？

この人、目は大丈夫？　ちゃんと見えてる！？

「てか、襲ってくるんじゃないの！？　早く倒し」

私が杖を構えて、魔物に向けようとしたけど勇者様が制止する。

目をぱちくりさせて呆然と成り行きを見守ることになった。

「大丈夫ですよ。ほら、かわいいじゃないですか」

勇者様が魔物の頭を撫でます。

やっぱり、すごい。

魔物までを……と思ったら、手を思いっきり噛まれていた。

大量の血が流れ出して大変なことになってるんだけど……。

「勇者様！」

私は、杖でスコーンと魔物をブン殴る。

魔物は「キー！」と奇声を上げて素早く逃げて行った。

「大丈夫？　てかバカも大概にしたら？　魔物なんか襲ってくるに決まってるじゃない」

とりあえず、呪文を唱える。

周囲を青い光が包み込み、勇者様の手の傷口を跡形残らず消し去った。

「ありがとうございますー」

「どういたしましてー」

にこにこ。

うん、このペースに乗ると何かおかしいわね。

「でも、僕は魔物とも仲良くなれると思ってますよ」

「噛まれたのに？」

「はい」

「襲いかかってくるのに？」

「はい」

勇者様は笑顔で頷くばかりだった。

そんなこと、実現できるのかなぁ？

gem19

大きな窓から見える空は相変わらず清く晴れ渡っていました。
それにしても、不思議です。
ここは、魔王城なんですよね？
一応、魔王というのは悪者であるわけですよね？
なのに――こんなに空がきれいに見えるものなんでしょうか？
疑問でたまりません。
まあ、考えていても仕方ないので私は窓から離れて、ベッドに腰を降ろします。
白い布団がふわふわしていて、とても気持ち良いです。
脇にある木製の椅子の上に置いてある本を手に取り、開きました。
昨日ムーラさんに貸してもらったものです。
早く読んでお返ししなければ。
そう思い、ページを捲ってみました。
頭が痛くなりそうなほどの難しい文字の羅列が長々と続いています。
パタンと本を閉じました。
どうやら、私にはこの本は向いてないようです。

シオールの部屋を訪れ、相談を持ちかけます。
「どうしたらいいんでしょうか……？」
シオールは、黒い机に肘をついて人の悪い笑みを浮かべます。
「さあ？　てか自分から貸せって言ってたのにどうするの？」

「そ……そうですけど……。貸せって言ったのは私ですけど！」
「まあ、縛られないといいね」
「縛られるんですか！？」

私はシオールに詰め寄りました。
縛られるとは恐ろしいことです。
ほら、縛られるって言ってもいろいろあるじゃないですか。
普通にぐるぐる巻きにされるのとか、あと……ごにょごにょ……
とても考えられません。
とりあえず、それは避けたいのですが。

「と、とりあえず読んだと言っておけば……」
「内容聞かれたらどうするの？」
「うう……」

確かに内容を聞かれてしまったら終わりです。
読んでいないことがバレてしまいます。
頭を抱えて唸りますが、解決策が思い浮かびません。
どうすればいいんでしょうか？
唸り続ける私に対して、シオールがさりげなく言います。

「何なら、音読でもしてあげようか？　幸い、その本は声に出して読むのに恥ずかしいところもないしさ」
「え？」

思わず目を丸くしました。
音読？
確かに、私は難しい本を読むのはとてつもなく苦手ですが、聞くのなら大丈夫です。
それにしても、何で急にそんな気になってくれたんでしょうか？

「あ、あの……何で急に……？」
「何でって気分だよ。それ以外に理由があると思う？」
「？」
「縛ろうか？」
「何でですかぁっ！？　首傾げただけじゃないですか！」
「ま、とりあえずその本貸しなよ」
「はい」

シオールに本を手渡しました。
私はおずおずと尋ねてみます。

「あの、ベッドで寝ながら聞いちゃダメですか……？」
「聞く気ある？」

ｇｅｍｅ２０

ベッドに寝転がってぼーっとしているとシオールが不満そうに口を開きます。

「あのさ」
「何ですか？」
「聞いてる？」
「へ？」

何のことだか分からず首を傾げます。
するとシオールの顔がひきつり、何とも黒いオーラが出てます。
何か怒らせたみたいです。まずいです、これは。
私は慌てて起き上がり、恐る恐る理由を尋ねました。

「あの、何で怒ってるんですか？」
「あのね、せっかく俺が音読してるっていうのに聞いてないじゃないか」
「……」
「何で目を逸らすかな？」
「長くて眠くな」

頭をコツンと叩かれました。
これが結構痛くて頭を抱えます。

「何で叩くんですか！」
「聞いてないからだろ？」
「それは、そうですけど！」
「いや、認めるところじゃないよね？」

確かにそうでした。
聞いていなかったことを認めたらシオールを余計に怒らせてしまします。
でも、認めてしまった今、弁解の余地は……。
シオールの様子を伺うとやっぱり怒ってます。
まあ、そうですよね……。
どう切り抜けたらいいんでしょうか？
なぜか逃げ出せないんですよね、こういう状況に陥ると。

「き、聞いてましたから」
「ふーん？　じゃあ、どんな内容だったか言ってみなよ」
「……」

言えません。
てか、いちいち聞きますか？
答えられずにいるとぐにっとほっぺをつねられました。
痛いです。かなり。

「痛いです……虐待はやめてください！」
「まあ、べつに……君が聞いてなくても俺は困らないけどさ。ムーラの機嫌を損ねるのは君だけなわけだし」
「うぐ……私、どうしたらいいんですか？」
「そう言われても」

目を逸らすシオールにしがみつきます。
格好悪いですが、縛られるのは嫌ですし……。

「見捨てないでください……」
「そうだね……」

シオールは苦笑いを浮かべました。
「分かったよ。何とか説明してあげる」
「あ、ありがとうございます」

それにしても。
私はシオールをじっと見つめました。
何だか最近は、最初会った頃とは変わってる気がします。
いや、べつに外見がかっこよくなったとかではなく……まあ、もともと悪くはないんですけど。いやいや、外見の話ではなく性格というより、態度ですかね？
シオールを凝視していると彼は怪訝そうに首をかしげます。

「どうかした？」
「いえ、その……優しくなったなぁと。前だったら、困っててもお助けしてくれなかったじゃないですか」
「俺はもともと優しいから」
「嘘は良くないと思います……」
「本気で縛られたいの？」
「違います。あ、お菓子でも食べませんか？」

黒いテーブルの上に置かれていたクッキーの皿を手に取り、シオールに手渡します。
それでいいのか、シオールはクッキーを一つ取ると口に運びました。
何とか怒りは収まったみたいです。
お菓子で収まるとは意外ですね。
私もクッキーを口に含みました。サクサクとした食感で甘くて美味しいです。

とりあえず立ったままと言うのもアレなんで椅子に腰を降ろします。
次々にクッキーを食べ、あっという間に空になってしましました。
もっと食べたいとか思っているとシオールが口を開きます。
「やっぱり俺は勇者に勝ちたいな」
「またですか。でも、勝ってどうするんですか？　世界を征服しちゃうんですか？」
「いや、別にそこに興味はないからさ。結局、どっちが勝っても何も悪いことはないんだよ。まあ、勇者の顔が立たないだろうけどね。そうだな……勝ったら――教えるわけないだろ」
「な、何なんですかそれ！」

日がすっかり沈み、夕飯もお風呂も済ませた私は部屋の電気を消して布団に入ります。
真っ暗な室内は少し恐ろしく感じました。
暗い天井を眺めていましたが、やがて目が疲れてきて閉じます。
ふと、扉が開く音がしました。
ムーラさんでしょうか？
ムーラさんは、よくちゃんと電気が消えているかとか確かめに来て、消えていたらすぐに立ち去るんですが、足音が近づいてきます。
誰でしょうか？

「起きてる？」

シオールの声です。何の用でしょうか？

私は、何となく返事をせずに寝たフリをすることにしました。

「寝てるのか。じゃ、好都合だ」

好都合！？

何するつもりなんでしょうか？　らくがき？　顔にらくがきとか嫌ですよ？

「俺は勇者に勝ったらさ」

教えないって言ってたのに何をするのか言うみたいです。

多分、私が起きてると分かっていたら言わないんでしょうが。

どんな表情をしているのか、目を閉じてるので分かりません。

てか人が寝てる時に言うんですから、普通は言えないようなことなんですよね？

「俺は、勇者に勝ったら――」

ふと、唇に何かが触れた気がします。

まさか！？

いや、この状況で目を開けることなんてできません。

ひ、人が寝てる時になんてことを！

今すぐ逃げたいですけど、動いたらダメです。寝たフリを。

その後は何も言わず、シオールは立ち去りました。

……知らないフリしなきゃいけませんよね？　でも、知らないフリできるでしょうか？　態度に出たりしたらまずいですよね……。

「……明日、まともにしていられるでしょうか……」

game21

「お、おはようございます……」

私は恐る恐るシオールに声をかけました。

昨日のことが頭に残ってるんで緊張してます。でも、気づいてないフリを通さなければ。

「どうしたの？」

「どうもしません」

「そっか。じゃ、行こう」

「へ？」

私は首を傾げました。

行くとはどこにでしょうか？

「どこに？」

「どこにって決戦かな。そろそろ勇者が来るはずだよ」

「勇者が……」

そう言えば、そうでした。

ずっとこの状況が続くはずはなく、勇者がここに来るはずなんです。

そして、戦う。

シオールの後に続いて階段を下り、黒い壁が印象的な大広間に到着しました。
真っ黒な床に大きな扉が見えます。
けれど、その場に勇者様の姿はありませんでした。
その光景を見たシオールは怪訝そうに眉をひそめます。

「おかしいな」
「え？」
「確か、今日のはずだったんだよ」

シオールは懐から一冊の本を取り出しました。
茶色いカバーのついた分厚い本でした。
その本のタイトルは、神のシナリオ。

「ここに書かれているのは、神が創ったシナリオだよ。この世界では、このシナリオ通りに動かなければ天罰が下るとされていた。でも、それは迷信だったね。意外にも自由に動くことができる。それを君が証明した」
「え……？」

game21（後書き）

今まで納得がいかなかったので、この章から書き足していきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5784x/

王女Bがヒロイン座獲得のため設定叩き潰します。

2012年1月2日08時47分発行